現代ロシア論　第五回 ５・２３

2007年8月27日
21:31

Copyright : Takumin

ノーメンクラトゥーラの二つの意味。→リストと特権階級の人。特権ってのは、上の人にはまったく逆らえないような感じだった。逆鱗に触れると特権剥奪にされるから。都市部の労働者が不足した。その時に農民がそこに入り込んでくる。住環境は非常に悪いが、農村よりは自由であった。なぜ自由かというと、労働が常に不足しているから、仕事を選べる。五カ年計画では、労働者の不足が常に起こる。
自由を認めたのでは、五カ年計画が順調には進まない。労働者の統制はどのように行われたかと言うと、工場企業の管理者を使った。国内で勝手に移動されないようにするために、国内パスポート制度を導入する。持ってない人は逮捕・職に就けないようにする、などしていた。拘束することで、技術を付けさせようとした。工場の長、企業の管理者とかは大きな権限を持ち、特権者へと上ってゆく。受益者として見返りをもらうようになる。五カ年計画によって、農民の自由が強まる、それを管理者が収めて、受益者となる。
軍が大きくなりすぎたので、縮小化が行われる。独ソ戦が行われる前の時期で５５０万人、前の１０倍になる。そうなると、管理者が必要になり、中間管理者層が増える。今までは管理者になれなかったものも採用されるようになる。受益者になる。これは革命前であれば、貴族の師弟がなるところだったのに、農民もなれるようになった。
ロシア帝国がソ連に変わった段階で、様々な民族が（今でも数々の民族がいるが）ロシア民族以外の民族を抱え込んでいた。イギリスとかも、異民族が大きくないにしろいるわけだが、そこでは能力を持った人は登用するが、中央までにはいけなかった。しかし、ソ連では、中央にも採用されるようになった。これは同化なのか？ソ連の場合は自ら望んでどうかさせてもらった民族も多かった。こいつらをどういう風に扱ったか。１９１７年の戦争が起こっているときの革命と言うのは、民族が独立しようとしていた、ナショナリズムが広がっている時期の革命であった。そうなると、共産主義者のインターナショナリストがナショナリズムを利用して、周辺地域にある少数民族の中で味方を作ろうとする。政治権力の中枢に入れてあげるとか。スターリンもそうだし。政治の上層部にロシア人以外の人がはいるのは当然となった。体制の受益者としての民族エリートと言うのはそういうのではなくて、中間層のことを言いたい。ロシアはソ連邦を作ろうとするのだから、いくつかの共和国から成り立っているので連邦共和国。これは民族を中心に出来上がってゆく。カザフ人が中心になっているところではカザフスタン共和国が出来上がっていくように。最終的に１５あって、ロシアを除く１４は、民族を中心としたエスニシティーを中心としていた。ロシアが民族を味方にするために、民族に共和国と言う形、国家機構を与える。そうすると、周辺民族、例えばカザフ人が連邦政府の支配権を握るようになる。上層部に上がれるようになる。当初は８％だったのが５３パーセントになったり。識字率も増えてゆく。本来なら上層部には上がれないような人達も、支配的なポストにつけるようにして、体制が動き出す。そうしないといつまでも反乱が収まらないだろう。廃止することもできたのにソ連はしなかった。民族的な法的分類も廃止しなかった。そのことにより、民族単位で連邦の中に存在すると言う現象が起こる。信じられないような出世をするようになった。今の大統領もカザフ人なんだが、この時代、ソ連時代の民族体制の受益者だった。ソ連は民族の牢獄っていうのは間違い、意味なし！！研究者の中では知られてる。ロシア人の民族の存在を維持する、増大させてゆく、できなければ民族学校を作って維持する、民族別の共産党作って出世できるようにした。初頭中等の学校を作った。どこの民族に属するかパスに書かせた。民族言語の新聞を作った。これは民族を増大させる装置であった。実は本当の受益者というのは、中央ではなくて、その周辺にいたのだ。民族エリートをどこまで取り込んでいけるかが、帝国が長続きするのかと言うことにつながる。それを証明するのが、ソ連崩壊を食い止めようとしたのが中央アジア五カ国であったということからもわかる。ソ連邦から出ていなかった。一方、バルト三国は、新参国で、そんなに意味を見出してはいなかった。これだけの民族を取り込んでいける体制がソ連にはあったと言うことが重要なのだ。
自分で同化されることを望んでいたアメリカを考えるとわかりやすいでしょう。自分の民族が重要なのではなくて、自分が同化されることで自分の生活が良くなったりするのを望んでなったと言う人が多いと言うこと。四番目のこと。

レジ目の＊
こういう人達が権力に躍り出る。通常なら貴族がなるはずのポストになるようになる。しかし、そんな生易しいソ連体制ではなく、「受益者の固定化・社会的上昇ルート」の閉鎖が行われる。と言うのは、社会的上昇は平等化に反するからだ。そう考える人が中枢にいた。エリートが固定化したりすると革命起こした意味がないと批判されるので、工場企業のボス支配（自主的に活動するエリート）をやっつけるために、定期的に点検して、悪い奴は追放するようにした。そいつらは中央権力からすると、不都合な人間だから。こういう形で、循環させようとした。その手段が点検。点検された人間同士で、

助け合うようにした。なかなかボスを追放できないようになる。すると、上層部の大規模な縮小が行われる。全部捕まえて、厳しい取調べをして追放する。中国の文化大革命に似てるよね。毛沢東が政治エリートを排除するために、若者にエリートを批判する機会を与えて、自分の敵を排除した。何が起こるかと言うと、特権を享受して暮らしつつ、同時に政治権力者によって特権を剥奪されてしまうことを恐れてびくびくしている昇進のエリート層が、まさに体制の受益者だった。結局大縮政につながるようなことはもうできない。くりかえすと、エリートが働かなくなるから。一番得したのは、１９３７年の大縮政後に、空いたポストに入っていった若年層の人達が真の受益者だった。ブレジネフとか。ソ連時代の指導者として、２０代に入って、続けることができた最大の幸福者。非常に強い制裁、非人間性を備えながら、いい方向に進んでゆく。日本人は多民族国家が持っている政治の複雑なバランスを理解できない。だから二次大戦のころ民族問題がいっぱい発生した。民族を中央に取り込むような余裕があれば、こんなにやったこと全てが批判されるようなことにはならなかったのではないか。ロシアには、明らかにブルジョアジーだなという人が、ブルジョア語を忘れて、ロシア語のみで生きている。それは明らかに、お父さんやおじいさんがソ連体制の中で、自分の出世をロシア帝国かソ連という多民族国家にかけて、自分の子供に自分の民族の言葉を教えなかった。で、「ロシア語を学べ、そして出世しろ」と言った結果、こんな状況ができている。そういうエリートを、ソ連体制の受益者であってソ連体制を支える人間がいなければ、二世代三世代にわたる様な体制は維持できない。ヒトラーの体制が　二世代三世代持ったとは考えにくい。膨張すれば膨張するほど矛盾を包み込んでいって、最終的には内側から破綻せざるを得ないような矛盾の塊になる。それに対して、膨張したところで、膨張した少数民族を内側に巻き入れて、そして彼らの積極的な支持を調達できるような体制でなければ、帝国的な体制は維持できない。簡単に言うと、多数民族が少数民族を抑圧している体制こそが帝国だっていうことはありえないっていうこと。歴史の中にはない。オスマン帝国やソ連という国家も、そういうものとして存在していたというところが重要。

民族的な抑圧がなかったということではなくて、抑圧があったけれども、同時に、民族を育成する、鼓舞するような体制であったということである。

貼り付け元 <file:///I:¥授業ノート2年生¥現代ロシア論¥現代ロシア論5・23.doc>